

C 会場

第19回 秋田県教育研究発表会資料

地域・学校・児童のリソースを生かした特殊学級経営  
仲間意識を育むためにー

平成17年2月10日

田沢湖町立生保内小学校 特殊教育部  
教 諭 齊 藤 智 恵 子

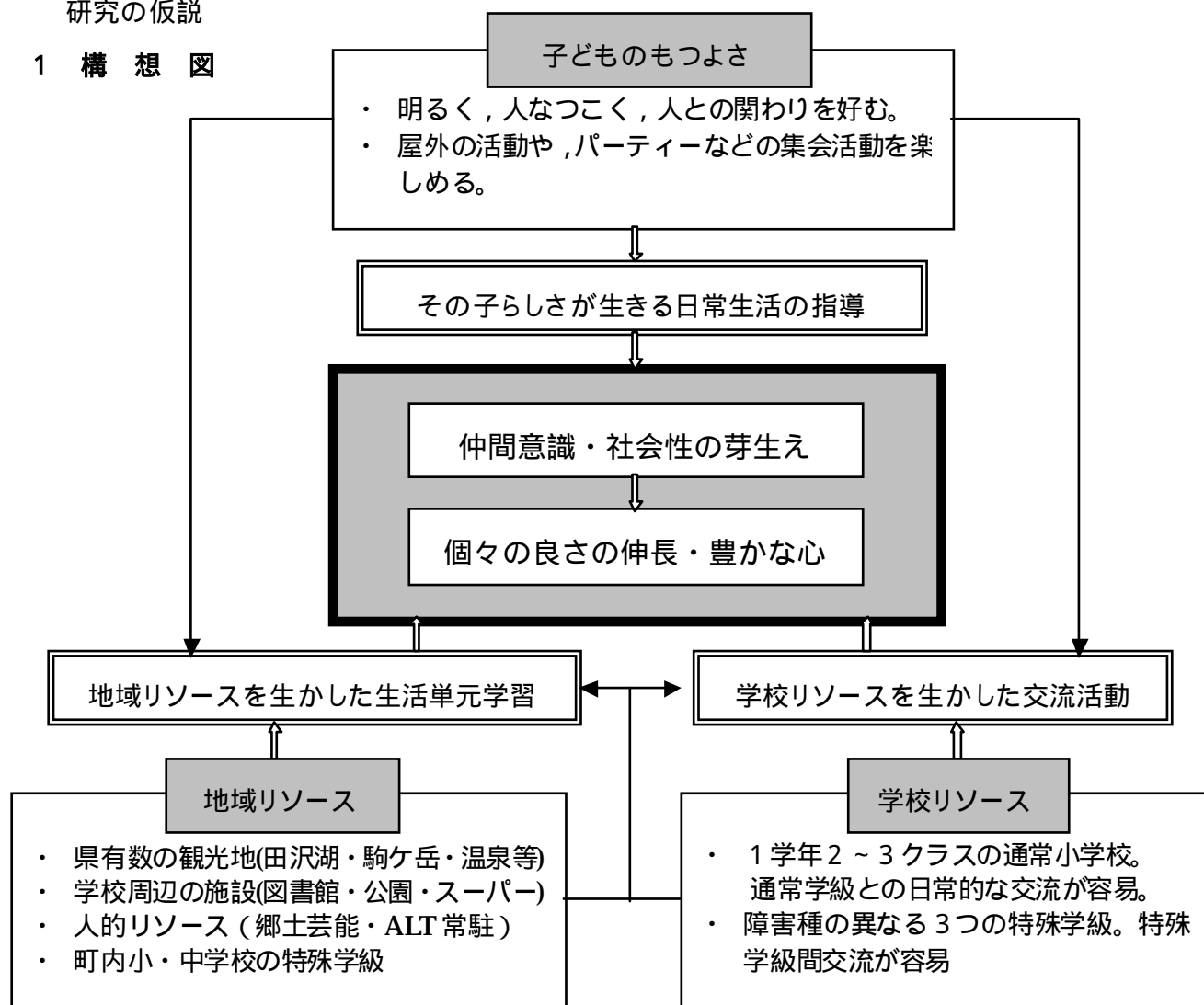
## 研究主題設定の理由

「リソース」とは、教育活動や援助活動を行う際に活用できる「資源」を指す。「リソース(資源)」には、教育活動に活用できる地域リソース・学校リソースのほかに、子ども自身のもつ「よさ」も含まれる。障害児教育においては、特に生活単元学習を組み立てる際に、このようなリソースを活用することが効果的であることが指摘されている。

本校には、3つの特殊学級（知的障害、情緒障害、病弱・肢体不自由）があり、4人の児童が在籍している。どの学級も1～2人の学級であるため、個に応じた指導がしやすい反面、友達との交流が少なく、社会性が育みにくい側面がある。そこで、様々な交流活動を通して、各々の児童の社会性や仲間意識、豊かな心を育みたいと考えた。その際、地域・学校・児童のリソースに着目し、それらを有効に生かした特殊学級経営を心がけることが、仲間意識や社会性を育み、個々の児童のよさを伸ばす上でも効果があるのではないかと考え、本主題を設定した。

## 研究の仮説

### 1 構 想 図



### 2 仮 説

地域リソースや学校リソース、さらには子ども自身のもつよさに着目し、それらを有効に生かした交流活動等を意図的に組み立て、特殊学級経営に生かすことにより、特殊学級児童相互、さらには特殊学級と通常学級児童との間に仲間意識が育まれ、それぞれの子どもたちのよさをよりよく伸ばすことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

## 研究内容

### 1 一人一人の「その子らしさ」が生きる日常生活の指導

#### (1) 朝の会

「日常生活の指導」は、朝の会・帰りの会・掃除・給食など、毎日の学校生活の場面で日常的に行われている。中でも、「朝の会」を特殊学級3クラス合同で行うことにより、特殊学級の児童が1日1回は必ず全員顔を合わせる機会を設け、仲間意識や役割意識を育もうと試みた。

表 1

「朝の会」の流れ	仲間意識・「その子らしさ」を生かす配慮
1. 朝のあいさつ	<ul style="list-style-type: none"><li>リズムに合わせのびのびと身体表現ができるような選曲。</li><li>お互いに名前を呼び合えるようにする。</li><li>役割の分担。</li><li>名前のマッチング。完成した時に認め合う言葉がけ。</li> <li>好きな話題を選ばせる。身体表現等も認める。</li> <li>それぞれに合った係活動。(保健係, お花係, 生き物係等)</li></ul>
2. 朝の歌	
3. 健康調べ	
4. カレンダー	
5. がんばりタイム	
6. きょうのおべんきょう	
7. きょうのきゅうしょく	
8. おはなしタイム	
9. 先生のお話	
10. 係のおしごと	

#### (2) 給食

給食は児童の実態及び保護者の願いを鑑みて、1人は通常学級で同学年児童と一緒に食べ、3人は特殊学級で食べることにした。特殊学級で給食指導を行う際に、配慮したこととしては準備・片付けなどの際に一人一人に応じた仕事を与えたことと食事指導(偏食・マナーへの指導)である。仕事がきちんとできたとき、苦手なものをがんばって食べた時、みんなで認め合う言葉がけを心がけた。

#### (3) アイ・メッセージ(わたしメッセージ)

教師側も、「その子らしさ」を最大限に認め、そのよさをアイ・メッセージ(わたしメッセージ)で言葉にして伝えるように心がけた。「大好き。」「うれしい。」「ありがとう。」「助かったよ。」といった言葉がけを意図的に多く使い、子どもたちへの勇気づけをはかった。

#### (4) ソーシャル・スキル・トレーニング

本校特殊学級児童の場合、中度発達遅滞の子どもが多いため、ソーシャル・スキル・トレーニングをグループで行うことは難しい。しかし、障害のある児童であるからこそ、より具体的な方法で人付き合いの基本を教え、その技能を身に付けさせる必要を感じる。特に基本ソーシャルスキルの「あいさつ」「やさしい頼み方」「上手な聴き方」「話し方」などは、その場で、具体的に、教師がモデルを示しながら教え、実践させるように心がけた。

### 2 地域リソースを生かした生活単元学習

#### (1) 地域の自然を生かした生活単元学習

田沢湖町は県有数の観光地であり、田沢湖・田沢湖高原・駒ヶ岳・乳頭温泉郷など、野外体験にふさわしい場が、数多く存在する。また、学校から歩いて10分以内のところに、公園や町立図書館、郵便局、スーパーマーケットがあることも生活単元学習を組む上で有益なリソースと考えた。そこで「地域：田沢湖」のよさに浸りながら、子どもたちが楽しく関わりあえる単元を考え、以下のような生活単元学習を実践した。

また、野外での活動の際には保護者にも案内を出し、子どもの活動の様子を見ていただきながら、できるだけ一緒に活動していただくようにした。

表2 「とびだせ！なかよし！」(校外学習)小単元名及びその主な内容

実施(月)	小単元名(場所)	主な内容	ねらい
4月	1.水芭蕉・カタクリを見に行こう (田沢湖・刺巻/西明寺)	・ 刺巻湿原の水芭蕉及び西明寺のカタクリの群生を見学。 群生地での散策及び花のスケッチ。	・ 郷土の美しさに触れる。 ・ 特殊学級児童間の交流
5月	2.生保内公園に行こう (生保内公園)	・ つつじの名所,生保内公園の見学。遊園地・フィールドアスレチックで遊ぶ。	・ 郷土の美しさに触れる。 ・ 特殊学級児童間の交流
	3.わらびとりに行こう (田沢湖高原)	・ わらびとりをし,自分たちであく抜きをする。 ・ 調理したわらびを交流学級に届ける。	・ 勤労体験 ・ 路線バスの乗り方 ・ 特殊学級児童間の交流 ・ 通常学級との交流
6月	4.遊覧船に乗ろう (田沢湖)	・ 路線バスに乗り,田沢湖へ。遊覧船乗船。 ・ レストランで自分たちで注文して昼食。 ・ 田沢湖散策。	・ 路線バス・遊覧船の乗り方・マナー ・ レストランでの注文の仕方・マナー
8月	5.田沢湖で遊ぼう (田沢湖)	・ 田沢湖散策及び遊泳。	・ 特殊学級児童間の交流 ・ 水遊び・自然体験
9月	6.ほうれん草つみにチャレンジ! (西木・檜木内)	・ ほうれん草畑に行き,ほうれん草つみを体験。摘みたてのほうれん草を調理して昼食。 ・ 後日ほうれん草ケーキを作る。	・ 勤労体験 ・ 買い物・調理 ・ 特殊学級児童間の交流

(2) 人的リソース生かした国際理解教育

また,町単独のALT(英語指導助手)がいることも人的リソースと捉え,10月には「ハロウィーン・パーティー」を企画・運営した。子どもたち自身が直接ALTの指導・アドバイスを受けながら,ゲームを準備したり,教室の飾りを作ったりした。パーティーには,町内の特殊学級児童も招き一緒に活動した。

表3 「ハロー！グラント先生！ハロウィーンパーティーへようこそ！」単元の概要(総時数 8時間)

実施(月)	小単元名	主な内容	ねらい
10月	1.ハロー！グラント先生	・ ALTとの出会い。スコットランドの写真を見せてもらう。 ・ 自己紹介(Hello. I'm~. Nice to meet you.)	・ 異文化理解 ・ ALT・町内特殊学級児童との交流
	2.ハロウィーンパーティーの準備をしよう	・ 飾り作り。ゲームの準備。(ALTの紹介による) ・ 案内状作り(他校の友達へ)。プログラムの作成。	・ 工夫しながら飾り作りをすることができる。 ・ 自分の言葉で案内状を作ることができる。
	3.ハロウィーンパーティーへようこそ	・ ALT・町内特殊学級児童との交流。 ・ 仮装。ゲーム。ダンス。Trick or Treat など	・ 友達と仲良く交流できる。

3 学校リソースを生かした交流活動

(1) 日常的な交流

特殊学級の設置校でなければできない交流が,通常学級児童との日常的な交流であろう。登下校,朝,帰りの昇降口でのふれあい,休憩時間での遊び,全校縦割り班による掃除等,学校生活でふれあう機会はたくさんある。本校では,休み時間に特殊学級の教室を開放し,通常学級の児童が遊びに来られるようにしている。

(2) 教科等の学習を通じた交流

4人の在籍児童は,その学習の状況に応じて,それぞれ在籍学年等と音楽・図工・体育・生活等の教科で交流学習を行っている。1人は実態を考慮し,在籍学年よりも下の学年と,3人は在籍学年との交流学習を行う。

表4

児童	交流教科(交流学年)
A児(2年男児)	音楽・体育(2年生)
B児(5年男児)	音楽・体育(5年生)
C児(5年女児)	音楽・図工・体育(2年生)
D児(4年女児)	音楽・図工・体育(4年生)

### (3) 特殊学級の生活単元学習での交流

通常学級児童に特殊学級の生活単元学習「なかよしバザー」に2年生の児童を招待し、交流活動を行った。

こういった形の交流のよさとしては、以下の4点が挙げられると思われる。特殊学級児童に合わせた活動内容であるため、特殊学級児童が活動に無理なく参加できる。特殊学級児童が主役となって生き生きと活躍できる。通常学級児童に特殊学級の児童や学習の様子をよりよく理解してもらえる。特殊学級と通常学級の児童がより親しみを感じることができる。

通常学級(2年生)では、特殊学級から招待されたことを受け、学級活動の一環として取り組み、ダンスなどの練習をして「なかよしバザー」に参加してくれた。「なかよしバザー」終了後、2年生からも「お店屋さん」への招待を受け、互いに交流を深めた。

表5 「なかよしバザーへようこそ！」単元の概要 (総時数18時間)

実施(月)	小単元名	主な内容	ねらい
11月	1. なかよしバザーの準備をしよう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ バザーで売る物を作る。(商品:しおり・折染め・紙粘土・まつぼっくりの人形・ブローチ・クッキー等)</li> <li>・ ゲームの準備。(魚釣りゲーム・ダーツ)</li> <li>・ 案内状, ビデオ・レター, プログラム作成</li> <li>・ 会場準備・リハーサル。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個に応じた制作活動</li> <li>・ 役割分担・協力</li> <li>・ 商品作りを楽しみながら, 根気強く取り組む。</li> <li>・ 相手を意識した, 案内状・ビデオレター作成</li> </ul>
12月	2. なかよしバザーを楽しもう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2年生児童(22名)との交流。</li> <li>・ バザー, ゲーム, ダンスなど</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 通常学級児童(2年生)との交流</li> </ul>

図1 「なかよしバザー」感想カード (2年生)

\*省略

#### 検証方法

##### 1 対象 : 特殊学級在籍児童4名(行動観察)

A児: 2年男児。中度発達遅滞。自閉傾向あり。(こだわりが強いが, 明るい。)

B児: 5年男児。中度発達遅滞。自閉症。(温厚で人なつこい。)

C児: 5年女児。病弱・身体虚弱。(コミュニケーション能力が高い。)

D児: 4年女児。情緒障害。本年度転入。(素直。音楽や身体表現が好き。)

: 特殊学級担任3名。特殊学級補助教員1名。各児童の保護者4名。(アンケート)

: 全校児童370名(アンケート)

##### 2 調査方法

###### (1) アンケート

の1~3の項目(「日常生活の指導」「生活単元学習」「交流活動」)の成果について, 特殊学級担任及び各児童の保護者にアンケートをとる。

また, 交流活動に関しては, 全校児童にもアンケートをとり, 交流学級と交流外学級との意識の違いを探る。

###### (2) 行動観察

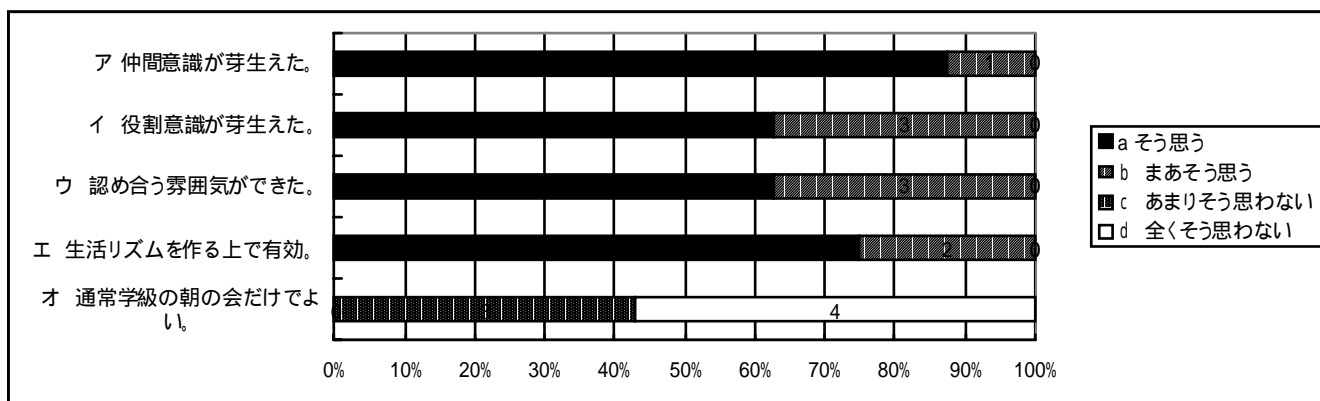
特殊学級在籍児童の各活動を通しての変容を観察する。特に, 「仲間意識」「個々のよさの伸長」が認められる具体的な行動に注目する。

## 結 果

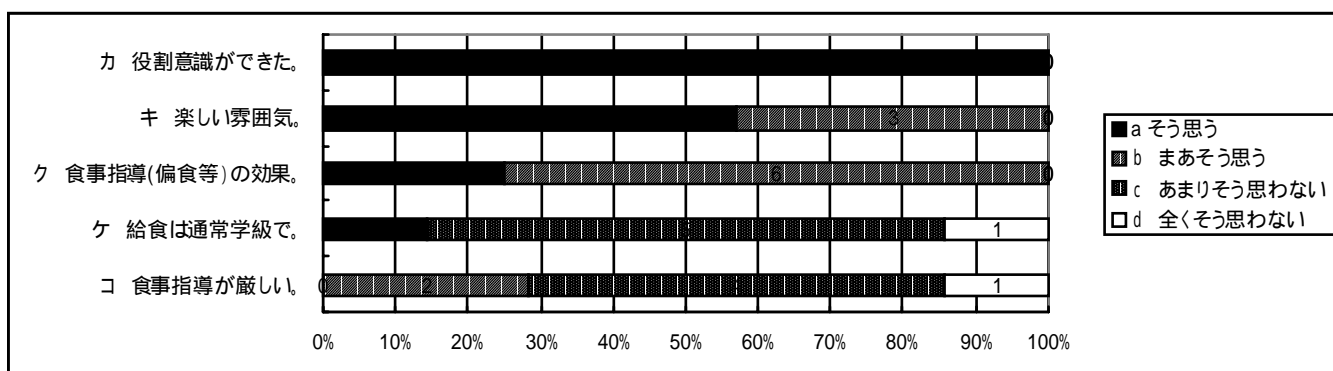
### 1 一人一人の「そのらしさ」が生きる日常生活の指導

(1) アンケート結果 (対象：特殊学級担任3名，補助教員1名，保護者4名)

朝の会について (オは逆転項目)



給食について (コは逆転項目)



### 自由記述より

- ・ 通常学級の朝の会にはない、「役割」があることの意味は大きいと思う。朝の会を4人そろってスタートさせることは、1日の始まりを意識できるし、仲間意識も生み、合同生活単元学習などで活動する上でとても役立っていると思う。(教師)
- ・ 何よりも他の特殊学級の友達に対する仲間意識が育っていると思う。友達に対する態度・言葉かけからもお姉さんとしてみんなに優しくする心が育っているように思う。(教師)
- ・ 友達(仲間)をみつけることができたと思う。互いに励ましあったり、友達のために我慢したり、譲ったりといった協調性の芽生えを感じる。(教師)
- ・ 日常生活については4人で生き生きと活動しているように感じます。生活のリズムも大分つかんできたように感じます。(保護者)
- ・ 仕事の役割を与えることにより、自分のやるべきことができるようになり、いいことだと思う。(保護者)
- ・ D児は偏食であり、少食であり、食べ方も幼いため、指導が必要であると考え。また、進んで準備・後片付けをさせることにより生活力が身についてきていると思う。ただ、好みのメニューが多い日には、一週間に一度ぐらい通常学級で食べ、通常学級児童との仲間作りをさせたい。(教師)
- ・ 特殊学級で給食を食べる方が、食事指導がしっかりでき、楽しみながら給食の時間を過ごせそうだ。(教師)
- ・ 給食を自分たちで準備することはいいことだと思う。ただ、通常学級に自然にいられる場合は、給食の時間という気もする。偏食指導は家庭との連携の上、行えばいいのではないかと思う。(教師)
- ・ 給食の準備のおかげだと思いますが、夕食の時、もうそろそろ食べる時間だなあと子どもが察すると、何も言わなくても1人でコップを運んだり、牛乳・麦茶をテーブルに持っていってくれたりします。(保護者)

## アンケート結果から

「朝の会」「給食」とともに「仲間意識」や「役割意識」を育てる上で効果があったとする回答が、「そう思う」「ややそう思う」を合わせて100%であった。また、「認め合う雰囲気」「楽しい雰囲気」に関しても、同様である。自由記述でも、「仲間意識ができたこと」や「協調性の芽生え」を指摘する記述が多い。朝の会に関しては、「生活リズムをつくる上でも有効」と考えており、「通常学級の朝の会だけで充分」とする回答は0%であった。この結果から、教師・保護者ともに「特殊学級での合同朝の会」が、子どもたちの「仲間意識」を育てる上で、非常に大きな役割を果たし、子どもたちにとって欠くべからざるもの、と捉えていることが分かる。

## (2) 行動観察より

児童	行動の様子（仲間意識・個々のよさの伸長）
A 児(2年男児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>朝学校に来ると、「B君は～?」「Cちゃんは～?」などと尋ね、必ず全員いるかどうか確認する。友達の名前を呼ぶ事が多くなった。</li> <li>着席行動...1年3学期までにできるようになった。</li> <li>健康観察の返事...1年2学期までにできるようになった。2年生になってからは、自分から友達の名をよぶこともある。</li> <li>お話タイム... <ul style="list-style-type: none"> <li>1年：ふざけた返事やオウム返しが多かったが、徐々にきかれたことに適切に答えるようになった。</li> <li>2年：自分から話したい話題を出すようになった。</li> </ul> </li> <li>給食...お弁当・牛乳運びを毎日がんばる。</li> </ul>
B 児(5年男児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>4年生から、友達の名前を呼ぶことが多くなった。</li> <li>着席行動...4年1学期にできるようになった。</li> <li>健康観察の返事...5年：友達の名を呼んであげられるようになった。</li> <li>お話しタイム...オウム返しがほとんどだったが、「何をしたの?」といった質問にも適切に答えられるようになった。</li> </ul>
C 児(5年女児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>司会...中心となって司会をがんばる。</li> <li>がんばりタイム...友達が完成させると「すごい!」「できたね!」と力強くほめたり、励ましたりすることができる。</li> <li>健康観察...積極的に友達の名を呼ぶ。</li> <li>お話しタイム...我先に話をしたがっていたが、順番を守ったり、人の話を聞いたりもできるようになった。</li> <li>「大好き!」「ありがとう」といった表現を積極的に使うようになった。</li> </ul>
D 児(4年女児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>お話しタイム...得意の身体表現を披露。みんなに「上手だね。」と声をかけられ、自信をもってきている。順序立てて話せるようになってきている。</li> <li>天気を自分で見て、判断できるようになった。</li> <li>「大好きだよ。」「かわいいね。」といった好ましい言葉かけができるようになった。</li> <li>給食...先生や友達に励まされ、偏食が改善されている。</li> </ul>
特殊学級児童全般	<ul style="list-style-type: none"> <li>子ども4人、先生4人いて、「全員いるね。」という安心感がある。一人でも欠けていると、誰ともなく「　　ちゃんは?」と心配する雰囲気がある。</li> <li>「カレンダー」「がんばりタイム」「お話タイム」など、自分の役割を認識し、順番を守って活動できるようになった。</li> <li>友達のがんばりや発表を「すごい。」「上手。」などお互いに称揚できるようになった。</li> </ul>

## 行動観察から

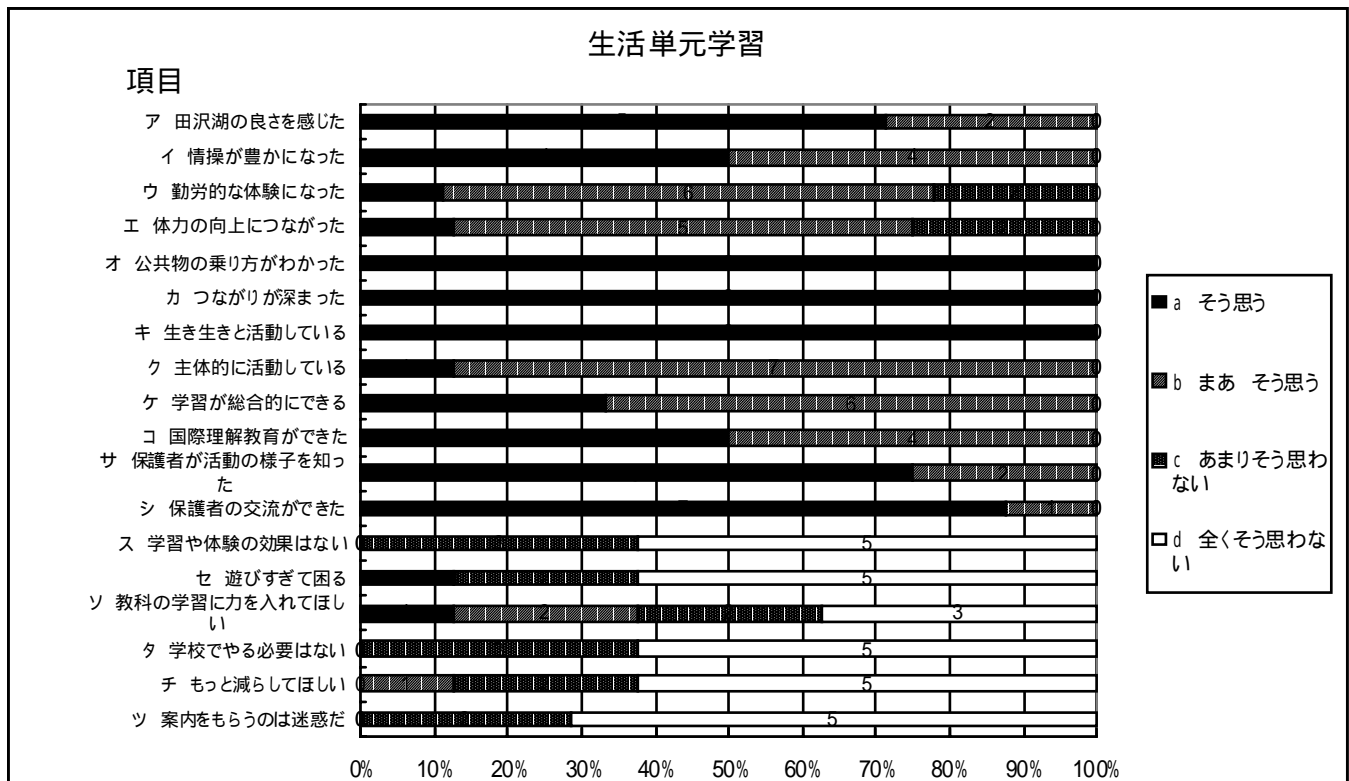
子どもたちが互いに名前を呼び合う頻度が高くなってきていること、欠席者がいると誰ともなく「　　ちゃんは?」と心配し合う雰囲気があることから、子どもたちの中に「子ども4人、先生4人でみんな」という意識が芽生えていることが分かる。

また、A児・B児の着席行動・返事、「お話タイム」の話し方の向上や、C児・D児の「大好き。」「ありがとう。」という表現が増えたことから、教師や他の友達のモデリングの効果が考えられる。

## 2 地域リソースを生かした生活単元学習

(1) アンケート結果 (対象：特殊学級担任 3名，補助教員 1名，保護者 4名)

生活単元学習について (ス，セ，ソ，タ，チ，ツは逆転項目)



### 自由記述より

- ・ 集団の中において、友達や先生・お家の方々に自然と関わることができる単元が多かったと思います。直接声をかけてもらうこともありましたが、友達の様子を見ることだけでも、本人にとっては良い学びの場になっていると思います。また、前年度に同じことを経験していることもありましたが、それがかえって自主的な行動をうんでいるのではないかと思います。本人のつぶやきや表情などから、印象に残る活動であったことは間違いないと思います。(教師)
- ・ 合同生活単元学習での活動は、自ら進んで楽しく活動している様子である。体験が不足しているため、様々な体験を通して生活力・情操が豊かになればと思う。体験後の作文も、活動の様子を短い作文にまとめられるようになってきている。学校生活に「はり」があり、普段の生活にもいい影響を与えている。(教師)
- ・ 転校生にとって、新しい地域の良いところ(環境)を知ることは良いことだと思う。自然に親しみ、美しさを感じたと思う。(教師)
- ・ 公共のバスに乗る機会となり、料金を払ったり、マナーを守ったりと子どもたちにとって、貴重な体験(勉強)になったと感じた。無事に降りた時の嬉しそうな表情からも、自信が着いたのではないかと思います。(教師)
- ・ 農業体験の経験が乏しいため、普段食べている野菜の姿や本物のおいしさを感じたと思う。(教師)
- ・ ていねいにほうれん草を刈り、袋に詰めるといった活動が勤労体験になったと思う。実際疲れが見えても、母親と一緒に最後までがんばる姿があった。(教師)
- ・ 外国の先生にも自然に打ち解け、積極的に話しかけることができ、楽しく過ごすことができた。(教師)
- ・ 司会をみごとにつとめ、また、大きな自信へとつながったと思う。(教師)
- ・ 生活単元学習は特殊学級の子どもたちにとってはとても重要な学習だと考えています。様々な体験活動を通して、人とのつながりやルール等を学ぶとても良い機会になると思います。(保護者)
- ・ 私は、ほとんどの生活単元学習に参加させていただきました。家庭内ではなかなか子どもたちにここまで体験させてあげるのは無理だと思います。きっと子どもたちは普段の学校では見せない顔で楽しんだことと思います。(保護者)



## アンケート結果から

生活単元学習に関しては、「子どもたちが生き生きと活動している」「子どもたちのつながりが深まった」という項目に、教師・保護者ともに100%「そう思う」と答えている。子どもたちの生き生きとした表情、お互いのやりとりから、このように感じたものと思われる。また「郷土：田沢湖のよさを感じた」「公共の乗り物の乗り方・マナーが分かった」という項目とともに、「保護者同士の交流ができた」という項目も「そう思う」という回答が多かった。野外での生活単元学習に保護者も一緒に参加していることから、保護者自身も他の保護者や子どもたちとの交流を楽しみ、その気持ちを子どもに重ね合わせていることも考えられる。

### (2) 行動観察より

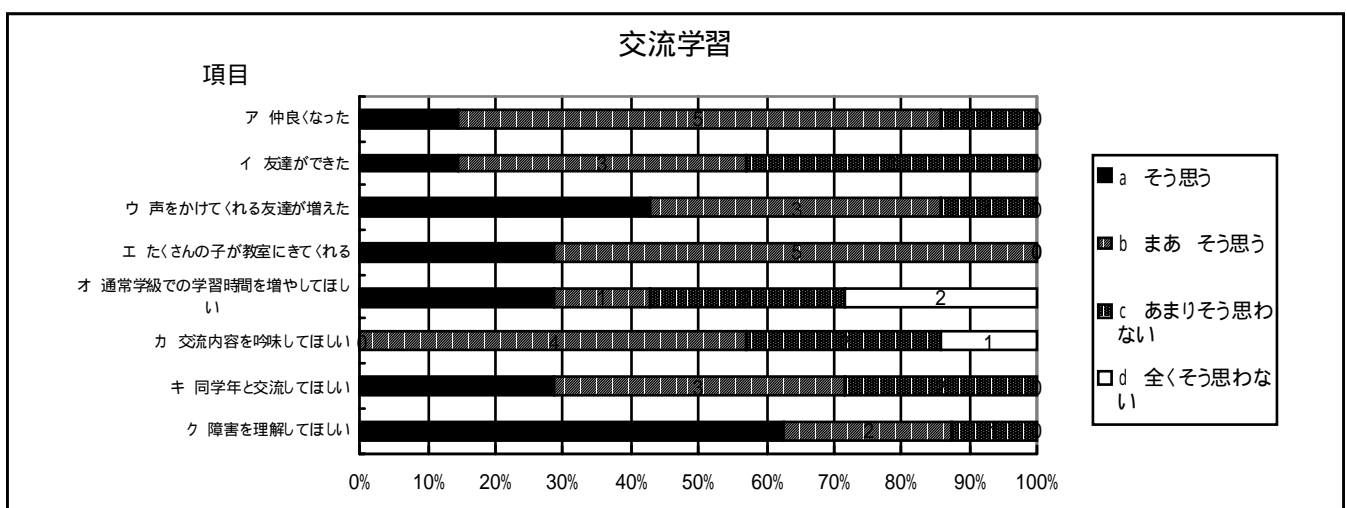
児童	行動の様子 (仲間意識・個々のよさの伸長)
A 児(2年男児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>4人でいっしょに行動することを楽しみにしている。大好きな生保内公園も一人では行きたがらない。4人一緒だと生き生きと活動する。</li> <li>歩くことが好きで野外活動を好む。4人で一緒に活動する時は、活動に集中できる時間が比較的長い。</li> <li>歩いている途中、道行く人にあいさつができる。</li> <li>ハロウィーン・パーティー...時間いっぱい、その場から逃げたりすることなく、みんなと一緒に楽しく活動できた。</li> </ul>
B 児(5年男児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達の名前を呼ぶ事が多い。</li> <li>活動の際、指示されたことに一生懸命取り組むことができるようになった。</li> <li>「わらびとったっけな。」「船に乗ったよ。」などつぶやく事が多い。</li> </ul>
C 児(5年女児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>パーティー活動が好きで、司会など張り切って取り組む。</li> <li>活動後、必ずみんなに感想を求め、「楽しかったね。」とまとめる。</li> <li>体力がなく、根気強さにかける面があるが、わらびとりやほうれん草つまみなど、みんなと一緒に最後まで取り組むことができた。</li> </ul>
D 児(4年女児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>新しい地域のよさを知り、楽しく活動している。</li> <li>体験後、活動の様子や気持ちを短い作文にまとめることができるようになった。</li> </ul>
特殊学級児童全般	<ul style="list-style-type: none"> <li>野外での活動やパーティー活動を楽しみ、生き生きと活動している。</li> <li>路線バスへの乗車・遊覧船への乗船など新しい活動の際、お互いに声を掛け合う姿が見られる。</li> <li>「どれくらいとった?」「うまいね。」などと友達を意識している発言が見られる。</li> <li>友達の活動ぶりをじっと見つめたり、がんばりを称揚する姿が見られる。</li> </ul>

### 行動観察から

お互いに声を掛け合ったり、友達の活動ぶりをじっと見つめたりする姿から、友達を意識し合っていることが分かる。また、A児・C児に見られるように、4人一緒の時は活動への集中時間が長い。活動自体の楽しさもあるが、友達がいてくれることの心理的効果も高いと思われる。

## 3 学校リソースを生かした交流活動

(1) アンケート結果 (対象：特殊学級担任3名、補助教員1名、保護者4名)  
交流活動全般について

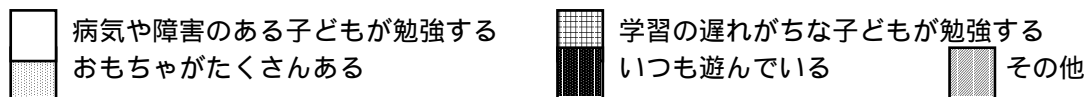
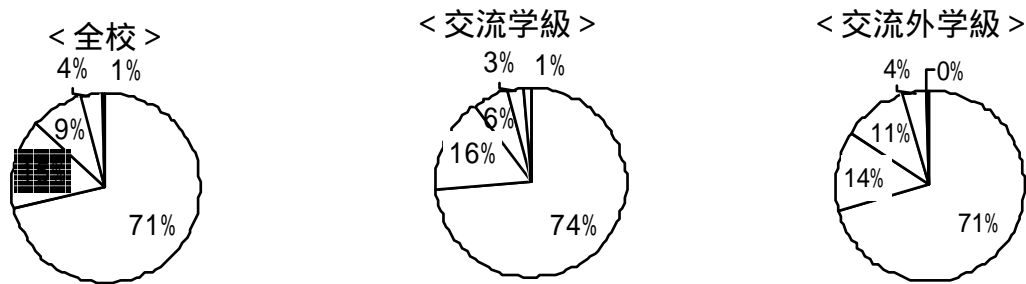


自由記述より

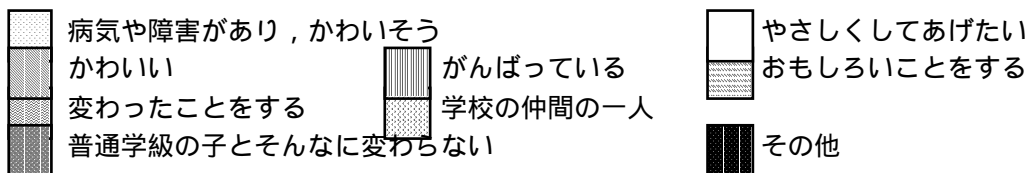
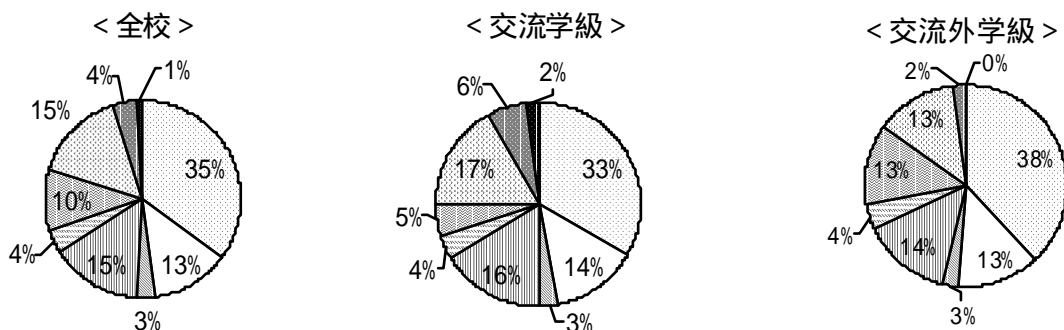
- ・一緒に歌ったり、合奏できる音楽は仲間の一人として自信を持って生き生きと活動している様子。交流することで友達ができ、親しみを込めてあいさつすることができている。また、同じ学年の一人として、一緒に活動がんばりたいという気持ちをもって活動に参加している。(教師)
- ・交流活動ではなかなかまわりの子と同じような活動ができなくなってきています。それでも、体育の時間にみんなが拍手をしてくれたり、賞賛の声をあげてくれたりしてくれるのはありがたいことだと思います。また「がんばれー。」と声をかけてくれたこともあって、本人も何となく理解したのではないかと思います。(教師)
- ・普段は個別もしくは少人数での学習形態であるので、交流学习時に順番を守ったり我慢しなければいけなかったりする場面があるので、子どもにとってプラスになると思う。実際順番を守ることや我慢することが少しずつたができるようになったと思う。(教師)
- ・特殊学級の活動をベースにしなが、通常学級との交流をすること、これも子どもにとっては重要な活動のひとつだと思っています。健全な子どもさんたちと触れ合うことはまた貴重な学習であり、これが普通学校にいる意義のひとつだと私共は考えています。(保護者)
- ・子どもの成長段階に合わせて、通常学級の子もたちとの交流を少しずつ増やしていった欲しいと思います。また、通常学級の子もたちにはもっと障害のことを理解して欲しいと思います。(保護者)
- ・もっともっと通常学級の子もたちに障害のことや優しい気持ちで接することを教えていった欲しいです。まちがった捉え方で、いじめにつながるようなないようにしてもらいたいです。(保護者)

通常学級児童の意識について (対象：全校児童 370名)

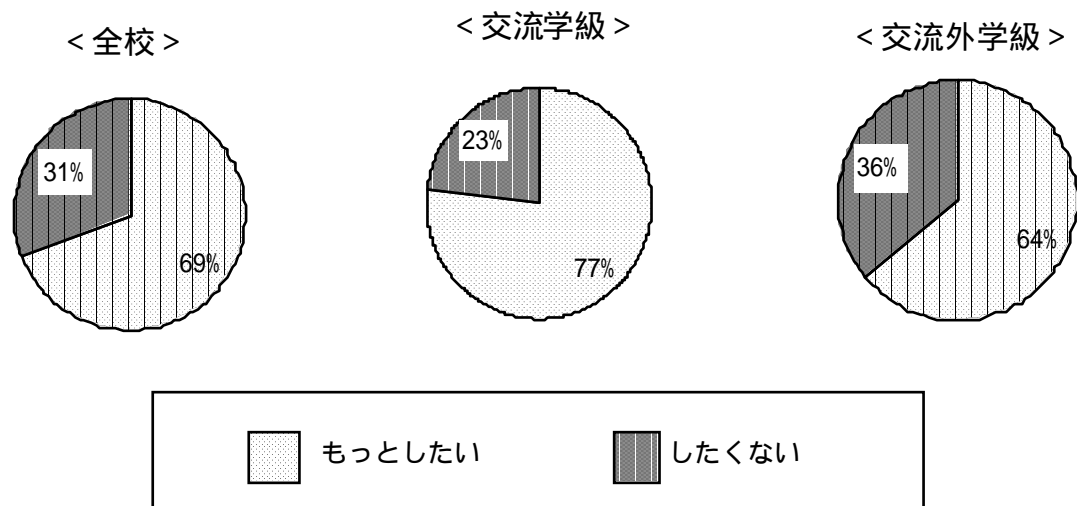
1) 特殊学級に対するイメージについて



2) 特殊学級の友達に対する気持ち



### 3) 勉強や遊びを通じた交流について



#### アンケート結果から

教師・保護者へのアンケート結果から、「たくさんの子が特殊学級の教室に来てくれる」「声をかけてくれる子が増えた」「仲良くなった」という回答が多い。確かに、廊下でいろいろな子が特殊学級児童に声をかけてくれるし、たくさんの子が特殊学級の教室に遊びに来てくれるが、特殊学級児童と遊んでくれる子はさほど多くはない。低学年児童の多くは、特殊学級にあるブロックで遊ぶことが目的で、特殊学級児童には無関心なように見える。高学年児童の中には、ブランコを押してくれたりする児童もいることから、全く関わりがないわけではないが、それは対等な友達関係とはいえない。「友達ができた」という項目に「あまりそう思わない」とする回答が40%以上あるのはそのような理由によるものと思われる。

また、「もっと障害を理解してほしい」とする回答が「そう思う」「まあそう思う」合わせて90%近くになることや、自由記述を見ても、保護者には、通常学級児童にもっと障害を正しく理解してもらいたい、もっと特殊学級児童を認めてもらいたいという気持ちが強いことが伺われる。

児童へのアンケート結果から、交流学級(2年・4年・5年)と交流外学級(1年・3年・6年)を比較すると、特殊学級に対するイメージはどちらもさほど変わらないことが分かる。特殊学級児童に対する気持ちとしては、交流学級・交流外学級ともに約50%の児童が、「かわいそう」「やさしくしてあげたい」「かわいい」と捉えているが、「学校の仲間の一人」と捉えている児童は交流学級で17%、交流外学級では13%であった。このことから、通常学級児童には、特殊学級児童との日常的な交流や教科交流を通して、「かわいそう」「やさしくしてあげたい」という気持ちが育っているが、「仲間」と捉えている児童はまだ少ないということが分かる。「もっと交流をしたいか」という質問に対しては「もっとしたい」という回答が、交流学級では77%、交流外学級では64%であった。交流したい理由としては、交流学級児童が「同じ学年・学級の仲間だから」という回答が多かったのに対し、交流外学級では「かわいそうだから」「障害をもっと理解したいから」といった回答が多かった。このことから交流学習が通常学級児童の特殊学級児童に対する「仲間意識」を育む上でわずかながら効果を上げていることが伺える。

#### (2) 行動観察より

児童	行動の様子 (仲間意識・個々のよさの伸長)
A 児(2年男児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>廊下でいろいろな子どもたちに声をかけてもらい、嬉しそうに笑っている。</li> <li>高学年児童にブランコを押してもらったりして、喜んでいる。</li> <li>休み時間、高学年児童が来てくれるのを廊下で待っている。</li> <li>なかよしバザー...2年生と「お店屋さんごっこ」でやりとりができた。</li> </ul>
B 児(5年男児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>体育の時間、みんなが拍手してくれたり、称揚の声をあげてくれたりしている時、じっとそちらを見ている。</li> </ul>
C 児(5年女児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>体育の時間、順番を守ってマット運動にチャレンジしたり、ルールを守ってみんなと一緒に折り返しリレー等に参加できるようになった。</li> <li>休み時間、低学年の友達を誘って遊ぶことができる。</li> </ul>
D 児(4年女児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>音楽...一緒に歌ったり打楽器で合奏に参加することができ、仲間の一人として生き生きと活動している様子。</li> </ul>

特殊学級児童全般	<ul style="list-style-type: none"> <li>廊下で自然に声をかけてもらうことが多く、嬉しそうな表情を見せる。</li> <li>通常学級での交流学习(音楽・体育・図工等)は、児童によっては内容についていけず、場の共有のみに終わっている場合もある。</li> <li>「なかよしバザー」では、それぞれに自分の役割を果たし、2年生と対応しようとする姿が見られた。</li> </ul>
通常学級児童	<ul style="list-style-type: none"> <li>廊下で声をかけてくれる児童が多い。</li> <li>特殊学級児童のがんばりを励ましてくれる声もある。</li> <li>「なかよしバザー」の後、より親しく声をかけてくれるようになった。(2年生)</li> </ul>

### 行動観察から

特殊学級児童の中には、通常学級の交流学习の内容についていけず、場の共有のみに終わっている児童も見られる。しかしながら、得意の音楽で生き生きと活動したり、通常学級児童に励ましてもらったり、ルールを守ったり、と交流学习は「個々の児童のよさ」や社会性を伸ばす上で効果があることが分かる。

励ましてくれたり、廊下で声をかけてくれる児童も多いことから、通常学級児童には、特殊学級の児童に対して「仲間」という意識まではいかないが、思いやりをもって接してくれようとしていることが伺える。

「なかよしバザー」の後、2年生がより親しく声をかけてくれるようになったことから、特殊学級の活動を公開し、交流の場を設けていくことが、通常学級児童の特殊学級児童に対する理解と、互いの交流を深めていく一助になると思われる。

## 考 察

### 1 一人一人の「そのらしさ」を生かすよさ

特殊学級に入級してくる児童の多くは、何らかの能力や学習態度についてマイナスの評価をされてきていることが多い。特殊学級の経営では、そういったマイナス部分の表れがその子の生活課題だと受け止めつつも、子ども自身が「そのらしさ」発揮しながら生き生きと生活する姿を追い求めていくことが大切であると川崎(1995)は指摘している。

しかし、「そのらしさ」というものは、1対1の個別の場面よりも、集団の場面でこそより輝くのではないだろうか。「集団が個を育てる」(國分1998)という。特殊学級児童は、その障害ゆえに、20~30人の大集団ではなかなかそのよさを発揮できないことが多いが、特殊学級の小集団の中であればむしろ生き生きと「自分らしさ」を出していけると思われる。

平成15年度以前は、独立した形で個別指導を重視していた本校特殊学級であるが、平成15・16年度と2年間に渡り、合同の「朝の会」を継続したことにより、子どもたちの仲間意識は明らかに育っている。

お互いの名前を呼び合うこと、一人でも欠席すると気にすること、がんばりを励ましあい、認め合えること。これらの姿から、比較的障害の重い(中度発達遅滞の子が多い)特殊学級児童の間にもウィネス(wenness われわれ意識・身内意識)(國分2001)が育っていることが感じられる。

安心して、信頼し合える仲間の中で、のびのびと歌ったり、好きな話題でお話したり、身体表現をしてみたりしながら、子どもたちが実に「そのらしい」姿を見せてくれていると感じる。

また、友達との関わりは、「自分」に気づかせてくれたり、ソーシャル・スキルの必要性を感じさせてくれる。よりよい関わり方について、教師に具体的に個別に教えてもらうことも多いが、教師や友達の良い行動を知らず知らずのうちにモデリングしていることも多い。「ありがとう」「大好き」といった勇気づけの言葉(会沢2003)が教室に響き渡っていることも、嬉しいことである。

### 2 地域リソースを生かすよさ

地域リソースに着眼して、生活単元学習を組み立てるよさは、地域の自然そのものが教材となり、交流活動の媒体となること 地域のよさを感じることができること 交通機関を利用したとしても、移動に比較的時間がかからないこと が挙げられる。

子どもにとって良い生活とは、「今日に満足し明日を楽しみにする生活」(小出1989)であるという。地域リソースを活用することで、学習に連続性が生まれ、子どもの生活に活力を与えていると感じている。

子どもたちは「地域：田沢湖」の自然にどっぷりとつかり、友達と関わりあいながら、生き生きと活動している。路線バスへの乗車といった新しいチャレンジにも、友達がいるから安心して取り組める。様々な活動を通して、子どもたちのつながりはいっそう深まっていることを感じる。

特殊学級児童4人のつながりがしっかりとできているからこそ、ALTや他校の特殊学級児童との交流にも躊躇することなく取り組めたと思う。様々な活動の中で、一人一人が自分の役割を果たし、それぞれのよさを発揮している。地域リソースがその大きな舞台になってくれたことは間違いのない。

### 3 学校リソースを生かすよさ

保護者が通常の小学校の特殊学級を選ぶ理由の一つとして、同じ地域内で育つ健全な子どもたちと共に育ってほしいという願いがある。そういった保護者の願いに応え、将来同じ地域で暮らす仲間として育つためにも、通常学級児童との交流は大事にしていきたい。

特殊学級の設置校のよさは、日常的な交流ができることである。あたりまえのこと、当然のことなので、第三者に理解されない、評価されない交流である、と大南（2002）は言う。しかし、朝・帰りの昇降口でのふれあい、休憩時間での遊び、掃除など、学校生活で日々何気なく当たり前に行われているふれあいの意義は大きいと思われる。特殊学級児童には、廊下で名前を呼ばれてにっこりする子どももいれば、照れて下を向く子、びっくりしてそっぽを向く子もいる。そんな子どもたちの反応に目を白黒させながらも、通常学級の子どもたちは徐々に特殊学級の子どもを理解していく。特殊学級の子どもたちも、その大集団の雰囲気には最初はおののきながらも、徐々に学校のくらしのルールを理解していく。休み時間、特殊学級に遊びに来てブランコを押してくれる子と、そんなお姉さんを待つA児の姿はほのぼのするものがある。

教科交流も、通常学級の児童とふれあう中で、ルールを学んだり、励ましてもらったり、集団のよさを体験できる良い機会となっている。また、特殊学級の授業に通常学級児童を招待することも、特殊学級児童を理解してもらい、対等な立場で交流できる嬉しい機会となった。

#### 今後の課題

平成 15・16 年度の実践とアンケート・行動観察による検証から、地域・学校・児童のリソースを生かした交流活動等を意図的に組み立てて、特殊学級経営に生かすことで、特殊学級児童相互の仲間意識は確かに生まれ、その中では児童がそのよさをのびのびと発揮できることが実感できた。

今後の課題としては、特殊学級児童と通常学級児童の間にどう仲間意識を育んでいくか、という点が挙げられる。通常学級の児童の多くは、特殊学級の児童に対して、「かわいそう。」「やさしくしてあげたい。」と思っている。しかし、学校の「仲間」の一人としては捉えきれていない。これは障害の理解が充分ではないことと、特殊学級児童が主体的にがんばっている姿を目にする機会が少ないことにも原因があるように思われる。特殊学級の授業に2年生を招待し、共に活動したことで2年生の児童が特殊学級児童により親しみをこめて接してくれるようになったことは、障害児理解のあり方のひとつの示唆を与えてくれているように思う。特殊学級設置校であるという本校のリソースをさらに生かしていくために、通常学級に障害児理解を発信していける特殊学級でありたいと考えている。

#### 【引用・参考文献】

- ・ 大南英明・緒方明子 2002 「障害児教育論」 放送大学教育振興会
- ・ 太田俊己・宮崎英憲・中坪晃一 2002 「障害児教育指導法」 放送大学教育振興会
- ・ 太田昌孝 2002 「発達障害児の心と行動」 放送大学教育振興会
- ・ 宮崎直男他 1995 障害児教育の新展開 18 「特殊学級の学級経営 楽しい40のアイデア」 明治図書
- ・ 川崎保男 1995 「その子らしさが生かしあえる学級作り」（障害児教育の新展開 18 「特殊学級の学級経営 楽しい40のアイデア」 p. 20~22） 明治図書
- ・ 宮崎直男他 1997 障害児教育の新展開 24 「特殊学級の生活単元実践モデル」 明治図書
- ・ 小出進 1989 「どの学級でもできる 新生活単元学習」 学研
- ・ トマス・ゴードン 1985 「T.E.T. 教師学 効果的な教師=生徒関係の確立」 小学館
- ・ トマス・ゴードン 1990 「親業・ゴードン博士 自立心を育てるしつけ」 小学館
- ・ 國分康孝 1998 「育てるカウンセリングが学級を変える[小学校編]」 図書文化
- ・ 國分康孝 1999 「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校 楽しく身につく学級生活の基礎・基本」 図書文化
- ・ 國分康孝 2001 「心を育てるカウンセリング - その原理と方法」 秋田・教育カウンセリング公開講演会資料
- ・ 曾山和彦 2004 「人間関係づくりに生かすソーシャル・スキル・トレーニング」 秋田・教育カウンセリング研修会資料
- ・ 曾山和彦 2002 「人間関係をよくするために ~ アイメッセージを使おう!!」 秋田・学校におけるカウンセリングを考える会 第9回学習会資料
- ・ 会沢信彦 2003 「『勇気づけ』で子どもを育む - 教育に生かすアドラー心理学」 秋田・教育カウンセリング公開講演会資料